

ねらい 決算整理事項の固定資産（減価償却）を学習する。

固定資産は不要になると売却することがあります。売却した時に帳簿上の価値と同じ金額なら問題ないのですが、通常、帳簿の価格と異なっている場合がほとんどです。例えば使用しなくなったパソコンを売却する場合、帳簿価格が46,000円でそれを50,000円で売却した場合はどのようなのでしょうか？

この場合は、帳簿上では46,000円ですが実際には50,000円で売れたので4,000円の利益が出たと考えられます。このように固定資産を売却して利益が出た場合には、固定資産売却益勘定を使用して、仕訳をおこないます。売却での利益・損失は売却価格と帳簿価格を比較して計算します。

仕訳する場合には、直接法、間接法の2種類の方法があります。

例) 帳簿価格が46,000円の備品（取得原価100,000円）を50,000円で売却した。

直接法の場合

(借方)	現金	50,000	(貸方)	備品	46,000
				固定資産売却益	4,000

間接法の場合

(借方)	現金	50,000	(貸方)	備品	100,000
	減価償却累計額	54,000		固定資産売却益	4,000

上記の例では売却益が出た場合ですが、売却価格と帳簿価格を比較して帳簿価格のほうが高くなる場合もあります。その場合は、減価償却売却損勘定を使用して仕訳をおこないます。

例) 帳簿価格が46,000円の備品（取得原価100,000円）を40,000円で売却した。

直接法の場合

(借方)	現金	40,000	(貸方)	備品	46,000
	固定資産売却損	6,000			

間接法の場合

(借方)	現金	40,000	(貸方)	備品	100,000
	減価償却累計額	54,000			
	固定資産売却損	6,000			

固定資産の減価償却は通常は決算整理時に行いますが、期中で固定資産を売却した場合は決算時には、資産は既にないので、売却時に減価償却の仕訳を行う必要があります。

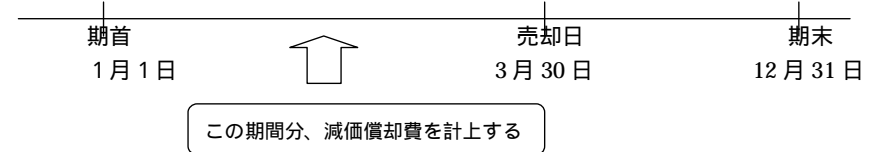
（試験では指定されている勘定科目で解答してください。上記2例の仕訳例の場合は、固定資産売却益 備品売却益：固定資産売却損 備品売却損で置き換えることもできます。また設問で備品部分が例えば車両ならば車両売却益、車両売却損となる場合もあります。）

固定資産の期中での売却について

固定資産を期中に売却する場合、実際に減価償却費も売却まで月割りで計算する必要があります。ですから帳簿価格は次の式になります。

$$\text{帳簿価格} = \text{取得原価} - \text{減価償却累計額（既償却額）} - \text{減価償却費月割額}$$

例) 取得原価 3,000,000 円、(耐用年数 5 年、残存価格は取得原価の 10%、期首減価償却累計額 540,000 円) の資産を 3 月 30 日に売却しました。売却価格が 2,400,000 円の場合と、2,300,000 円の場合の仕訳を間接法で行いなさい。(ただし期首は 1 月 1 日とします。)



まずは、簿価を計算します。

減価償却費の計算は、 $3,000,000 \text{ 円} \times 0.9 \div 5 \text{ 年} \times 3 \text{ ヶ月} \div 12 \text{ ヶ月} = 135,000$ となります。

減価償却の累計額が 540,000 円なので、 $3,000,000 - 540,000 - 135,000 = 2,325,000$ 円簿価は 2,325,000 円となります。

売却価格が 2,400,000 円の場合

売却価格が 2,400,000 円の場合は、簿価より高く売却したことになるので、売却益 75,000 円が発生します。仕訳は以下のようになります。

(借方)	現金	2,400,000	(貸方)	車両	3,000,000
	減価償却累計額	540,000		固定資産売却益	75,000
	減価償却費	135,000			

売却価格が 2,300,000 円の場合

売却価格が 2,300,000 円の場合は、簿価より低く売却できたことになるので、売却損が発生します。仕訳は以下のようになります。

(借方)	現金	2,300,000	(貸方)	車両	3,000,000
	減価償却累計額	540,000			
	減価償却費	135,000			
	固定資産売却損	25,000			